

さんむのふるさと散歩

NO.34

ここまでわかった
松尾城 その二、

今回は松尾城築城を命じた藩主太田資美(注一、写真)についてお話しします。

そもそも、太田氏の家系は清和天皇に連なる源氏の血筋であり、由緒のある家柄です。

資美から数えて15代前の当主が有名な太田道灌(資長)にあたります。

道灌の死後、太田家は暫く低迷期を迎えます。

そんな太田家の転期となったのが、徳川家康の関東入国です。

家康は先祖が同じ源氏の流れを汲む太田家を大切にしました。

道灌から数えて四代後の重正の妹・お勝は、兄重正と共に家康の側近に仕え、戦

にも家康に付き従った女傑

でした。後に家康の側室になり、女子を生みますが、その子は早死にしまいました。

憐れんだ家康は、お勝に子鶴君(徳川頼房・水戸家の始祖)の養育係を命じます。

また、お勝は春日の局と図り、三代將軍家光の即位に尽力しました。

お勝のこのような功績により、甥の資宗は後に大名に取り立てられることになったのです。

その資宗が大名になる前に、参陣した大坂夏の陣の功績で最初に与えられた所領の一つに、上総武射郡(現在の山武市の一部)がありました。

資宗はその後、幕府の役職に付くとともに、度々加増(領



※注一

土を増やすこと)されて、遠州・掛川藩(現在の静岡県・掛川市一体)五万三千五石の領主となります。(資宗は、掛川藩太田家藩祖と呼ばれています)

藩祖資宗から七代後の藩主・資美が15歳となった、明治元年(一八六八)新政府による徳川家の遠洲転封に伴い、資美は領地を武射、山辺両郡に移されます。

資美は、藩祖・資宗の代に与えられた領地に帰ってきたわけです。

明治二年、資美は武射郡柴山村(現芝山町)の観音教寺(通称、芝山仁王尊)に仮藩庁を置き、柴山藩として藩政を開始しました。

資美は藩庁建設地の選定

作業を進め、八田・大堤・猿尾・蕪木地区一帯の台地上を適地と定めて、松尾城の築城に着手します。

松尾城の名前の由来ですが、旧領地掛川藩時代の居城・掛川城の別称・松尾城に由来します。また資美の藩邸の置かれた桔梗岡の名前も、太田氏の家紋「丸に桔梗」(注二、写真)に由来しています。



※注二 太田家の家紋「丸に桔梗」の鬼瓦

明治三年十一月には、藩政の中心というべき藩庁及び資美の藩邸が完成し、移転作業のすえ、明治四年正月、「松尾藩」と改名しました。

しかしこの時点でまだ城下全体は工事途上でした。そして工事の完成を見ることは、ついに無かったのです。

この年の七月、明治政府は廃藩置県を断行し、松尾藩は松尾県となりました。

この時、松尾藩知藩事だった資美は免官され、東京居住を命ぜられます。資美の芝山・松尾藩の藩政は、ここに終わりをつけるのです。

資美の藩政は四年間という短い期間でしたが、藩校「教養館」の設置の他、厚生面では病院「好生所」を創設し、産業振興策として養蚕を奨励し、「物産会所」を設置するなど善政を敷いています。

また、幕末維新の混乱期にあつて統率のとれた家臣団を有した松尾藩は地域の治安維持にも貢献しました。

東京に移った後の資美は、家禄の一部を旧藩士に贈り、廃業後の生活を援助するとともに、慶応義塾設立にも関与するなど私学教育の振興に尽力し、大正二年に亡くなりました。

【参考・引用文献】

別冊歴史読本・辞典シリーズへ第11号「日本姓氏家系総覧 発行・新人物往来社 1991年 松尾町の歴史特別編 発行・松尾町 1983年

問 歴史民俗資料館

(82)2842